

第37回 飲酒のパターン

本川 裕 | Honkawa Yutaka
アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。(財)国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌「国民経済」, 2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社, 2010年)、「統計データが語る 日本人の大きな誤解」(日本経済新聞出版社, 2013年)等。



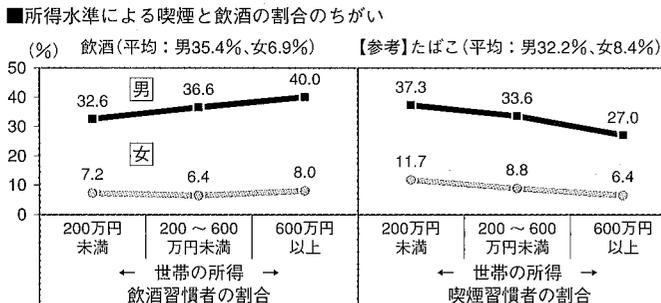
お酒の習慣と飲酒上の失敗

前回に続き、飲酒について取り上げる。今回は、お酒に関する興味深い調査データをアラカルト的に紹介する。

アルコールについては、飲食料品の需要というより健康対策の対象であるため、国際統計ではFAOではなくWHOが、また国内統計では農林水産省ではなく厚生労働省が主としてデータを取りまとめている。なお、酒類の産業統計についても、経済産業省ではなく、酒税の関係から財務省が主管である。酒はそれだけ特殊な分野だといえよう。

まず、飲酒習慣についてであるが、厚生労働省の「国民健康・栄養調査」の2010年版では、他年次版にはない所得別の状況の集計や飲酒トラブルの調査結果を掲載し

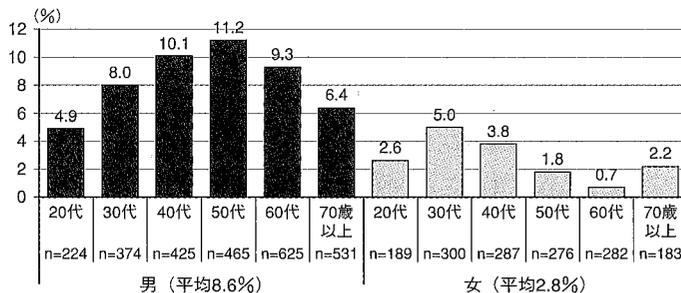
図1 飲酒の習慣と飲酒トラブル (2010年)



注) 20歳以上。解析対象は3,189世帯、うち200万円未満733世帯、200~600万円1,787世帯、600万円以上669世帯。データは年齢と世帯員数で調整した値。飲酒習慣者は「週に3日以上飲酒し、飲酒日1日当たり1合以上を飲酒する」と回答した者、喫煙習慣者は「これまで合計100本以上又は6か月以上たばこを吸っている(吸っていた)者のうち、「この1か月間に毎日又は時々たばこを吸っている」と回答した者」

■飲酒が原因のケガの状況

「あなたの飲酒が原因で、これまでにあなた自身か他の誰かがケガをしたことがありますか。」という問いに「あり」と答えた者の割合(お酒を飲む人及びやめた人への問い)



資料) 厚生労働省「平成22年国民健康・栄養調査結果の概要」

ているので、これを見てみよう（図1参照）。

飲酒の習慣をもつ者は、平均では男は35.4%と3分の1以上、女は6.9%と1割以下となっている。たばこの習慣をもつ者とほぼ同等の水準である。所得水準によるちがいをみると、たばこは低所得者の方がよく吸っているが、飲酒習慣は高所得者の方が多いという特徴がある。ただし、女性の飲酒習慣のみは、所得による違いが余り明確でない点も見逃せない。男の場合、お酒を飲む宴会の機会が高所得者ほど多く、それだけ肥満を避けるのも難しいのではなからうか（本連載第26回「金持ちほど身体がスリム？」2013年9月号参照）。

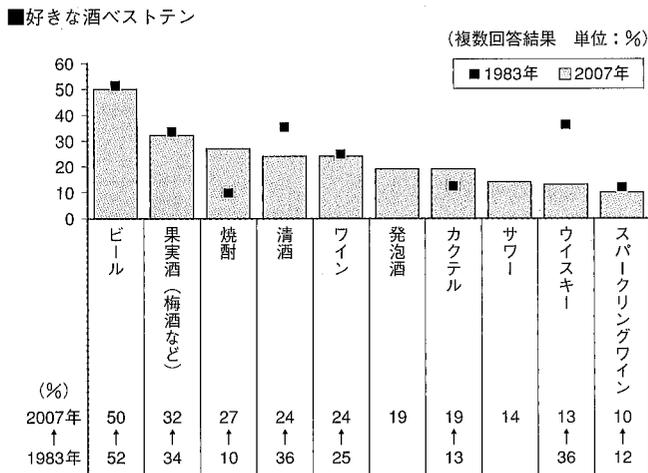
次に、同じ調査から、この年次のみ設問である飲酒が原因のケガの状況を見てみよう。お酒を飲んだことのない人を除くと、男は8.6%、女は2.8%がケガのトラブルを経験している。特に、男50代であると11.2%と1割を超えている。これが、前回でも紹介したように、世界的には飲酒を道徳的に許されないと考える国民が多い理由であろう。女性は飲酒が原因のケガの経験率は2.8%と少ないが、30代は5.0%と男20代の4.9%より高くなっているのがやや不思議である。

好きな酒と愛好度の変化

次に、NHKの調査から、日本人の好きな酒と愛好度の変化を探ってみよう（図2参照）。

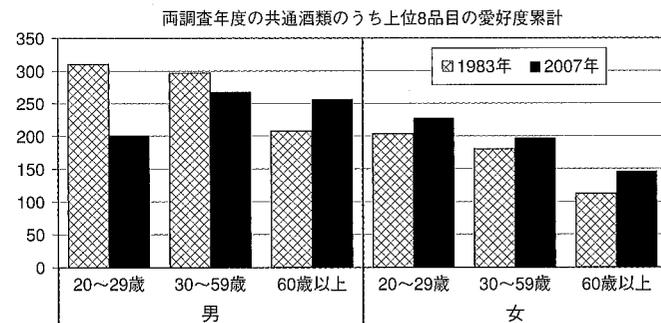
消費金額でもそうであるが、愛好度でもビールが一番となっている。第2位以下は果実酒、焼酎、清酒、ワインと続いている。1983年から2007年

図2 日本人の酒類愛好度



注) 2007年調査の上位から並べた。1983年データなしは当時選択肢なしが番外。
スパークリングワインは1983年にはシャンパン。1983年データは20歳以上に補正した。

酒類愛好度の推移 (男女・年齢別)



資料) NHK放送文化研究所世論調査部「日本人の好きなもの」2008年
NHK放送世論調査所編「データブック 日本人の好きなもの」1984年

にかけての変化では、清酒やウイスキーの人氣が衰え、焼酎やカクテルの人氣が上昇したことが分かる。発泡酒やサワーといった新しい酒類もこの間に登場した。

同じ調査の性・年齢別集計結果から、両年次に共通する酒類の上位8位までの愛好度の累計を計算してみると日本人のお酒の習慣の変化がうかがわれて興味深い。

1983年には、性・年齢別に分かりやすい法則が成立していた。すなわち、男女とも若い世代ほど酒を好み、また、世代にかかわらず女より男の

方が酒を好むという傾向が明確だった。そして、男の若年層・中年層の愛好度は高年層と比較して格段に大きかった。

1983年から2007年へかけての24年間の変化については、女性はすべての世代で愛好度が上昇、男性は高年層は愛好度が上昇したが、若年層・中年層では愛好度が低下、特に若年層の愛好度が大きく低下した。こうした変化の結果、男の若者や働き盛りが酒飲みの中心を占める、ある意味で、過去の伝統を引き継いでいた時代から、性・年齢に関わりなく、お酒を楽しむ時代に大きく様変わりしたといえよう。

特に男の若年層の低下は著しく、2007年には、女の若年層と愛好度で逆転するまでになっている。今や飲み屋で大騒ぎするのは、若い男性ではなく若い女性なのである。こ

れは、草食男子と肉食女子という新時代の傾向と軌を一にするものだろう。

なお、男の若年層とは対照的に、男の高年層では愛好度が上昇しているのは、高年層が以前より健康で余裕のある生活を送るようになり、また、高度成長期の飲酒習慣を持ち越して楽しむ層が増えたからであろう。

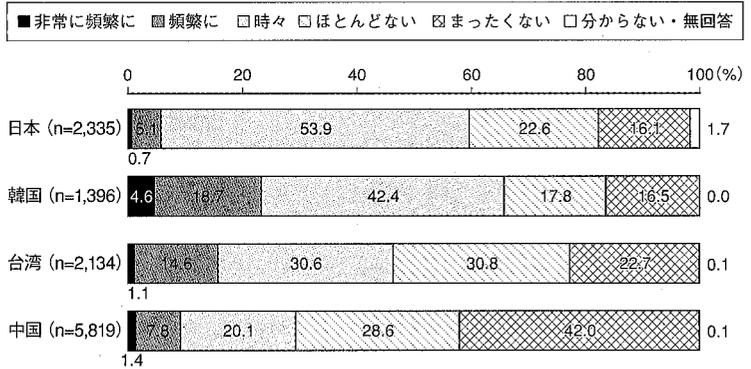
宴会のパターン

お酒が人間関係の結合強化に役立てられているのは、多くの国での共通現象だといえる。日韓

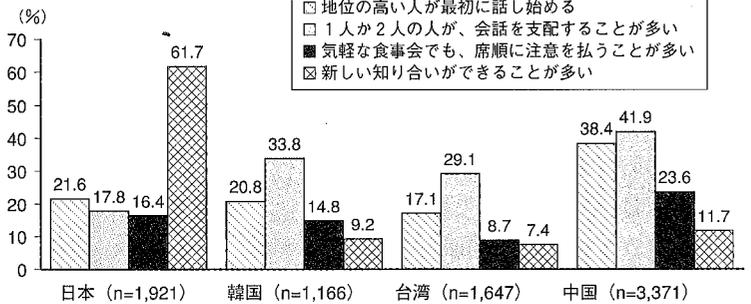
図3 宴会をめぐる人間関係（日本・韓国・台湾・中国）

A: 宴会の頻度

あなたは、家族や親類以外の3人以上の人と、どのくらいの頻度で外食したり飲みに行きますか。



B: 宴会時の状況



注) 2012年に実施された各国共同調査 (EASS2012) による (各国18歳以上の男女が対象。ただし日本は20~89歳の男女が対象)。「B:宴会時の状況」はAの設問で「まったくくない」あるいは「無回答」以外の人の各設問への「はい」の回答結果 (ただし「新しい知り合いができることが多い」の割合は、「新しい知り合いができることは、どのくらいありますか」という設問に「非常に頻繁に」及び「頻繁に」と回答した者の比率)

資料) 大阪商業大学 JGSS 研究センター「East Asian Social Survey: EASS 2012 Network Social Capital Module Codebook」2014年3月

台中の共同調査である東アジア社会調査 (EASS) プロジェクトの第4回のテーマは「東アジアの社会的ネットワークと社会関係資本」であり、この観点から、宴会 (家族・親類以外との飲食) について調べている (図3参照)。

宴会の頻度では、もっとも頻繁に宴会が行われているのは韓国であり、台湾、中国がこれに続いている。宴会が「まったくくない」人が多い中国でも、他方では、「頻繁に」宴会する者は日本より多いのである。これに対して、日本は「頻繁に」は少なく、むしろ「時々」の値が最も多くなっている。

宴会時の状況を見ると、日本では「新しい知り合いができることが多い」とする者が6割以上となっており、韓国、台湾、中国が1割前後と非常に少ないのと対照的な姿となっている。また、中国では、地位の高い人や主要人物が宴席を主導している点が目立っている。日本は、最初の発声者や席順を気にする点では中国に次いでいるが、会話は韓国や台湾より自由に行われている。

以上を総合すると、日本では、宴会が、人間関係の輪を広げたり、新しく結成された集団の結束を図ったりするための常套手段として活用されているのに対して、それ以外の国では、むしろ、宴会は職場や取引先などとの既存の人間関係を固めることに努力が傾けられているように見える。

柳田國男は、「群飲制度」と特徴づけられる酒宴の機能が、明治以降、村人の結束を図る役割から転じて、見知らぬ日本人同士の懇親手段として国民統合に役立てられたと論じている。「知らぬ人に逢う機会、それも嗜れがましい心構えをもって、近づきになるべき場合が急に増加して、得たり賢しとこの古くからの方式を利用しはじめたのである。明治の社交は気の置ける異郷人と、明日からすぐにもともに働かねばならぬような社交であった。(中略) 根本は人が互いに知り、速やかに全国感覚の統一を図ろうという志にあったので、いわば世間知識の授業料の覚悟をもって、この第三生活費の膨張を厭わなかったのである」(柳田國男『明治大正史 世相篇』中公クラシックス、p.217～218)。こうした由来から、上記のような日本的な宴会パターンが形成されたのだと理解できる。男女の集団見合いともいうべき合コンもこうした

表1 酒類消費都市トップ5 (2011～2013年平均)

* 数字は対全国比

	酒類計		清酒		焼酎		ビール	
	1位	盛岡市	1.31	新潟市	1.96	宮崎市	2.41	盛岡市
2位	青森市	1.30	秋田市	1.67	鹿児島市	1.98	札幌市	1.31
3位	秋田市	1.28	盛岡市	1.42	山口市	1.51	広島市	1.25
4位	新潟市	1.28	松江市	1.37	青森市	1.44	京都市	1.24
5位	広島市	1.19	金沢市	1.33	松江市	1.35	大阪市	1.24
	ウイスキー		ワイン		発泡酒・ビール風アルコール飲料		飲酒代	
1位	青森市	2.57	東京都区部	2.43	高知市	1.99	高知市	2.03
2位	さいたま市	1.68	横浜市	1.76	新潟市	1.54	東京都区部	1.56
3位	盛岡市	1.65	甲府市	1.59	青森市	1.40	長野市	1.55
4位	秋田市	1.60	川崎市	1.58	熊本市	1.40	宮崎市	1.41
5位	札幌市	1.59	仙台市	1.48	山口市	1.37	山形市	1.33

注) 家計調査1世帯当たり品目別年間支出金額(二人以上の世帯)の都道府県庁所在市及び政令指定都市ランキング
資料) 家計調査

宴会パターンの派生形態と位置づけられよう。

お酒の支出額が多い地域

最後に、家計調査の結果から酒類消費支出額の多い地域を表であらわした(表1参照)。

酒類計は家庭で購入する酒の合計であるが、この点での酒豪都市トップ3は盛岡、青森、秋田である。外食の一部であり酒類計には含まれない飲酒代(飲酒に伴う料理を含む)の方から見る酒豪都市トップ3は高知、東京、長野である。

全国平均の2倍程度以上の消費額となっている点で目立っているのは、新潟の清酒、宮崎・鹿児島焼酎、青森のウイスキー、東京のワイン、高知の発泡酒・ビール風アルコール飲料、高知の飲酒代である。ビールは全国的に好まれており、最も消費が多い盛岡でも全国の3割増し程度に止まっている。

* 「社会実情データ図録」関連図録

- [1] 図録0336「日本人の好きな酒ランキング」
- [2] 図録2218「所得水準による肥満度・生活習慣のちがい」
- [3] 図録7763「各地域ではどんなお酒が好まれているか」